

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2023

課題番号：21K20233

研究課題名（和文）An Investigation of English Language Learners' Attitudes Towards Global Englishes: For A Paradigm Shift in English Language Teaching

研究課題名（英文）An Investigation of English Language Learners' Attitudes Towards Global Englishes: For A Paradigm Shift in English Language Teaching

研究代表者

船田 なつの (Funada, Natsuno)

東京大学・グローバル教育センター (ALESS/A) ・特任講師

研究者番号：20912330

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000 円

研究成果の概要（和文）：英語に関する態度の研究では学習者がネイティブスピーカーに好意的であるのに対して、それ以外の英語話者に対して否定的な態度をとることが分かっている。本研究は質問票およびフォーカス・グループを通じて、英語と英語教育に関する態度に関し詳細な研究を行った。学習者はネイティブスピーカーだけではなくそれ以外の英語話者に関しても好意的な態度を示すと同時に英語教育ではネイティブスピーカーの英語の重要性を主張する等、学習者の複雑な英語及び英語教育に対する態度が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

By overcoming the obstacles in the extant studies, this project improved the breadth, depth, and accuracy of the collected data, revealing the complex English language learners' attitudes in a global context. The findings would be pertinent not only to researchers but also to teachers.

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to show how English language teaching (ELT) could be reshaped to match the new sociolinguistic reality of the 21st century by examining the attitudes of current English language learners in a global context. This study addressed the need to conduct rigorous attitude research through a model that links students' traditional ELT attitudes and Global Englishes Language Teaching (GELT) attitudes using validated scales and focus-group interviews. The results demonstrated that students' traditional ELT preferences positively impact their preferences for GELT, revealing another layer of complexity to GE-related innovations.

研究分野：Global Englishes

キーワード：Global Englishes ELT Language attitudes Attitude change

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

英語はグローバル化により、様々なコミュニティとの接触言語としての役割を担うことによって、多様化した。対立や摩擦、差別、格差と不平等、文化・アイデンティティーの軋轢といった社会的課題が指摘される中で、1980 年代初頭から、そういった社会との関わりにも注目し英語を理解すべきという認識が高まった。その一つが Global Englishes (GE) という発想である。GE は、「グローバル化する世界における英語使用と英語使用者の言語的、社会言語的、社会文化的多様性と流動性に注目する包括的パラダイム」(Rose & Galloway, 2019, p. 4) と定義され、グローバル化する社会と学習者の英語使用の関係を踏まえ、英語教育のあり方を見直す必要性を明らかにしたものである。現在主流のネイティブスピーカーによって話される英語を規範とする指導はそれ以外の英語に対する偏見や差別を生み、問題視されている (Canagarajah, 2014)。英語教育では、21 世紀の言語、文化、アイデンティティー、コミュニティをありのままに反映し、学習者がグローバル社会に対応できる英語能力を身につけられるようにすることが今求められている (Rose & Galloway, 2019)。上記パラダイム転換の呼びかけに応えるかたちで、学習者の GE の発想に対する態度 (GE 態度) や GE の発想を取り入れた指導による態度変容についての研究が近年増加している (Rose & Galloway, 2019)。しかしながら現在、GE 態度の詳細までは明らかになっていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、グローバル化や情報化の急速な発展で、社会や言語の多様化が進む中、英語学習者の態度を調べることによって、英語教育の問題を明らかにし、そのあり方を批判的、理論的に問い直すことである。多くの研究から、学習者がネイティブスピーカーによって話される英語を好む (伝統的志向) と同時に GE に対する寛容さを示す (グローバル志向) など、学習者の態度は複雑であることが分かってきている (Galloway, 2017)。しかしながらこれらの研究は、質的であり調査方法も統一されていない。さらに量的な調査であっても GE 態度のみに焦点が当てられている場合が多く、上記志向の直接的な関係はまだ調査されていない (図 1 参照)。英語学習者の態度に関し、伝統的志向とグローバル志向両方を統一の方法で調査することで、GE 態度の概観をより正確に把握する必要がある。

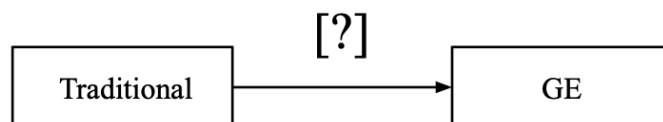


図 1. 研究目的 (Traditional:伝統的志向 ; GE:グローバル志向)

3. 研究の方法

研究対象：全国の英語学習者を対象 (N>600) とした。

調査内容・方法：当該分野の課題を踏まえ、混合研究法(Quantitative → Qualitative)を取り入れた大規模な調査を行った。英語学習者の GE 態度を信頼性、妥当性及び厳密性を考慮した以下の調査方法を用いて行った (図 2 参照)。

- **Quantitative data collection & analysis**: 学習者の GE の態度を正確に測定するため Funada, Montakantiwong, Briggs Baffoe-Djan, and Rose (2020) を参考にした GE 志向尺度を使用した。この研究で使われた尺度は、学習者の文化的、社会的、教育的な環境を考慮した指導に対する態度を把握するためのものである。尺度は言語使用多様化に重点をおく GE 指導方法及びネイティブスピーカーの話す英語を手本とする従来の指導方法の是非等の項目が含まれる。本研究で尺度の信頼性と妥当性が確認された。主なデータ分析は、R（統計分析ソフト）を使用した因子分析等が含まれる。
- **Qualitative data collection & analysis**: 上記のアンケートに加え、態度をより正確に把握するために、学習者の英語学習歴や英語の授業に関するトピックに関しフォーカスグループを通じて調査を行った。データ分析は NVivo（質的データ分析ソフトウェアツール）を使用し、量的調査分析結果を参考に行われた。

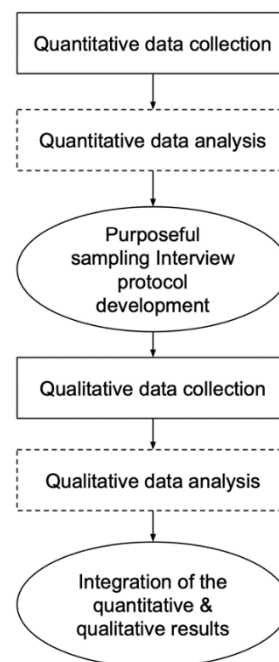


図 2. 研究方法

4. 研究成果

分析の結果、英語使用の際の目標となるグローバル言語としての英語を規範とする授業に対する態度とネイティブスピーカーの英語を規範とする授業に対する態度の 2 因子の間に強い正の相関があることがわかった。さらにフォーカスグループを通じて、様々な英語に深く触れる機会が多いほど（例：タイからの留学生と有意義な会話をした）、グローバル言語としての英語という認識が高く、必ずしも「標準」や「ネイティブ」の英語にこだわる必要はない、授業でも様々な英語に触れたいと考えていることが分かった。しかしながら、このようなグローバル言語としての英語という認識が高い場合でも、アメリカ及びイギリス英語に代表されるネイティブスピーカーの英語を好意的に捉えた。むしろ授業でネイティブスピーカーの英語を好む傾向が強ければ強いほど、グローバル言語としての英語という認識が高いことが分かった（図 3 参照）。理由の一つとしては学生がネイティブスピーカーの英語以外に関して少なからず抵抗があり、その偏見を覆すような経験がないことが挙げられた。以上から英語教育において学習者が実際にグローバル言語として英語を使ってコミュニケーションをする機会を単に提供するだけでなく、計画的に学習者の態度変化に寄与するようなアクティビティを取り入れることが大変重要であることが分かった。

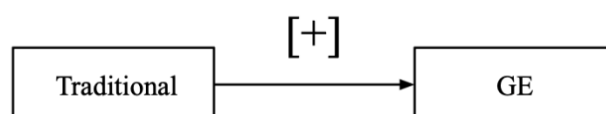


図 3. 研究結果（Traditional:伝統的志向；GE:グローバル志向）

本研究ではサンプリング及び学生の英語を使用する機会が全体的に不足している等の問題があり改善の余地があるものの、グローバル化に対応した英語教育を行うためには、様々な英語が実際に使用されている場面で学生自身が当事者として積極的に参加し、定期的に肯定的な

経験をする機会を与えることが重要であることがわかった。具体案の一つとしては教室内で国際共通語としての英語コミュニケーションに必要なストラテジーを教え、教室（内・）外で遠隔地の学生（例：中国、ブラジル、イタリア）とのオンラインコミュニケーションを行うことが考えられる。実際にヨーロッパではすでにこの試みが行われており（e.g. Kohn & Hoffstaedter, 2015）、現在の日本のインターネットの普及を考える（Miniwatts Marketing Group, 2019）と日本でも導入が十分に可能である。また態度変化に効果のあるとされる Structured intergroup activities の導入なども考えられる（Dragojevic et al., 2021）。今後はこのような試みを通じた学習者の態度変化に関する研究が期待される。また上記のような新たな教育課題に対応できる力を持った教員の養成が必要不可欠である（Funada & Xie, forthcoming）。

<引用文献>

- Canagarajah, A. S. (2014). Theorizing a competence for translingual practice at the contact zone. In S. May (Ed.), *The multilingual turn: Implications for SLA, TESOL and bilingual education* (pp. 78-102). New York/Abingdon, UK: Routledge.
- Dragojevic, M., Fasoli, F., Cramer, J., & Rakić, T. (2021). Toward a century of language attitudes research: Looking back and moving forward. *Journal of Language and Social Psychology*, 40(1), 60-79. <https://doi.org/10.1177/0261927X20966714>
- Funada, N., Montakantiwong, A., Briggs Baffoe-Djan, J., & Rose, H. (2020). Global Englishes Orientation Questionnaire (GEO-Q) Version 1.0. <https://doi.org/10.13140/RG.2.2.33157.58086>
- Funada, N. & Xie, X. (forthcoming). Online communities of practice in teaching EIL. In N. Galloway and A. F. Selvi (Eds.). *The Routledge handbook of English as an international language*.
- Galloway, N. (2017). *Global Englishes and change in English language teaching: Attitudes and impact*. Routledge.
- Kohn, K., & Hoffstaedter, P. (2015). Flipping intercultural communication practice: Opportunities and challenges for the foreign language classroom. In J. Colpaert, A. Aerts, M. Oberhofer & M. Gutierrez-Colon Plana (Eds.), *Task design & CALL. Proceedings of the seventeenth international CALL conference* (pp. 338-345). Antwerp, Belgium: University of Antwerp.
- Miniwatts Marketing Group. (2018). *Internet world stats: Usage and population statistics*. Retrieved June 24, 2020, from <https://www.internetworldstats.com/>.
- Rose, H., & Galloway, N. (2019). *Global Englishes for language teaching*. Cambridge University Press. <https://doi.org/10.1017/9781316678343>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Natsuno Funada, Xie Xiaowen	4. 巻 —
2. 論文標題 Online communities of practice in teaching EIL	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Routledge handbook of English as an international language	6. 最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Natsuno Funada
2. 発表標題 Development of the Global Englishes Orientation Questionnaire: For curriculum innovation in English language teaching
3. 学会等名 AAAL Conference 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuno Funada
2. 発表標題 Students' language attitudes in global contexts: For effective EIL pedagogy
3. 学会等名 TESOL International Convention 2023（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Natsuno Funada
2. 発表標題 Communities of practice in teaching English as an international language
3. 学会等名 UTokyo Faculty Research Forum 2022（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------